新潟県西蒲原郡巻町四ツ郷屋方言の副助詞

大橋勝男

Ⅰ．はじめに

（１）調査対象地：日本海沿岸、新潟県のほぼ中央に位置する。新潟市の南西約２０キロ。畑作農業。西瓜・メロン・たばこ・大根を作る。1998年2月末現在、世帯数141、人口564。（第７巻拙論「1997年1月現在、世帯数635、人口2159」は、「世帯数139、人口569」の誤り）

（２）調査年月日：1998年3月5日　午前9時30分～11時50分

（３）主教示者：高杉トモエ　1925年9月27日生（72歳）

同席者：高杉ヒヨイ　1920年10月25日生（77歳）

高杉ミキエ　1930年7月27日生（67歳）

（４）調査者・調査場所：大橋勝男・四ツ郷屋公民館

（５）調査方法：当該調査票による質問調査

（６）表記方法：① 方言事象はカタカナ表音表記とする。

② アクセントは高音部に傍線を付す。

③ 回答事象が複数にわたる場合は、斜線（／）を付し列記する。順序は、教示者の回答順とし①②③のようにする。

④ 筆者の説明は ＜＞ 中に記す。

Ⅱ．調査結果

（１）添加・例示・提題などをあらわすもの

A．添加《さえ・も》

１．雨だけでなく風さえ吹いてきた。　○アメバッカデ　ノーテ　カーゼマレ　ツイテキタ。

２．今年は豊作で、米ばかりか麦もよくとれた。　○コトシワ　サクガ　ヨーテ　コメバッカレ　ノーテ　ムギモ　サクガ　イカッタ　コテヤー。

B．予想外の事実《さえ・だけ》

３．小学生でさえ簡単にワープロを使っている。　①コンゲナガン　コドモデサカ　ツコーテル。／②コドモデモ　ツコーテル。

４．（宝くじが）当たると思っていなかっただけに嬉しい。　①タカラクジ　ナーンニモ　アテニ　シテ　ネーヤンニ　アタッタッテ　ヤ。アー　イカッタ　テヤ。／②タカラクジ　ナーンニモ　アテニ　シンカッタンニ　アタッタッテ　ヤ。イカッタ　テヤ。

C．条件《さえ》

5．暇さえあれば釣りに行っている。　○ヒーマサカ　アレバ　ツリラノ　ゴルフラノトンデ　アルイテル。

D．例示《でも・ほど・まで・など・やら・なり・なんて》

6．まあお茶でも飲んでください。　①オチャデモ　イッペ　ノメ　ノ。／②オチャグレノンデ　イゲッ　テヤ。

7．みやげにはこのまんじゅうなどどうかな。　○ミヤゲニワ　コノ　マンジューナンカイヤンデ　ネー　カ。

8．思わず跳び上がるほど嬉しかった。　○トービアガルホド　ウルーシカッタ　レヤ。

9．まさかあなたにまで話が行くとは思わなかった。　○アー　タマゲター。マーサカ　オマエマデ　ハナシ　イグトワ　オモワンカッタ　レヤ。

10．なぐるやら蹴るやらの乱暴をはたらいた。　○チョータクスルヤラ　フンガラカスヤラノ・・・・。

11．私になり相談してくれれば良かったのに。　○オンナリニ　ソーダンシテ　クッレバイカッタ　コテアネ。

12．野菜なんていくらでもできる。　①センザエモンナンカ　イックラモ　デキル。／②センザエモンナンテ　イックラモ　デキル。

一対の語の例示《だって》

13．しょうゆだってみそだって作っていたんだ。　①ムカシワ　ショーユダッテ　ミソダッテ　ミンナ　ツクッテタダ　レヤ。

択一《なり》

14．私なり弟なりがお手伝いに行きます。　○オレダノ　オジガ　ダレカ　テツダイニイグ　ガイ。

例外でない《とて》

15．村長とて、そうするより仕方なかったんだろう。　○ソンチョーダッテモ　ソー　シネバ　ダメラッタンラ　バ。<～だめだったのだよ。>

列挙《も》

16．春らしくなって、梅も桜も一度に咲いた。　○ハルラシ　ナッテ　ウメモ　サクラモイッペンニ　サイタ　ノー。

同類の暗示《も》

17．テレビもそろそろ買い替えよう。　○テレビモ　フルシナッタネ　ソロソロ　トッカエル　カエ。<～古くなったので～>

やわらげ《でも》

18．まあお茶でも飲んでください。　○マー　オチャデモ　ノメ　ノ。

E．包括《など》

19．盆には子や孫などが帰ってくる。　○ボン　ナルト　コドモダノ　マゴタチ（ダノ）

ガ　カエッテ　クル。

F.提題《だって》

20. ゲートボールだってできるよ。　○オル　ゲートボールラッテ　デキル　コテヤー。<おれは～>

話題にあげる《って》

21. 何だい、いいことって。　○ナニダー 。 ソンゲ　イー　コトッテ。

極端なものの提示《でも・くらい・すら・も》

22. そんなこと子供にでもできるよ。　○ソンゲナ　コト　コドモデモ　デキル　ワ。

23. 食べることくらいは何とかしたい。　○クーグレワ　ナントカ シタイ。

24. 名前すらろくに覚えていない。　①ナマエスラ　オボエテ　ナイ。／②ナマエマデ　オボエテ　ナイ。／③ナマエモ　オボエテ　ナイ。

25. 弁当代に千円もかかった。　○ベントーダイ センロモ　カカッタ　レヤ。<～千両も～>

軽いものをあげる《さえ》

26. これさえあればもう大丈夫だ。　①コッラ　アレバ　ダイジョブラ　ガ。／②コレサカ　アレバ　ダイジョブラ　ガ。／③コレサエ　アレバ　ダイジョブラ　ガ。

（2）分量・程度・基準などをあらわすもの

G.分量・程度《ほど・くらい・ばかり》

27. 旅行で三日ほど家をあけた。　①アスビニ　イッテ ミッカモ　ウチ　アケタ　レヤ。／②リョコーデ　ミッカバカ　ウチ　アケタ。

28. 茶碗に半分くらいください。　①ハンブンバカ　クレ　ヤ。／②ハンブンモ　アレバ　イー　コテヤ。

29. 子供にでもわかるくらいのやさしい本だ。　○コドモタチデモ　ワカルクライノ　カンタンナ　ホンダ。

30. 一週間ばかり留守にするので頼むよ。　○イッシュカンバッカ　ルスニ　スルスケタノム　レー。

H.基準《ほど》

31. 今年の寒さは去年ほどではない。　○コドシノ　サムサワ　キョンナホド　サーブネー　ワ。

I.理由《ばかり》

32. ちょっと油断したばかりにとんでもないことになった。　①チョット　ユダンシタバッカニ　トンデモ　ネ　コト　ナッタ　テヤ。／②チョット　ユダンシタバナェ　タイヘンナ　コト　オキタッ　テヤ。

J.「それにふさわしく」《だけ》

33. 苦労しただけあって人間ができている。　○セツネ　メ　シタダケ　アッテ　ニンゲン　ガ　デキテアダ　ガ。

形式名詞的用法《なんか》

34. 毎日孫のお守りやなんかで忙しい。　○メァーンチ　マゴノ　モリコヤナンカデ　ヨーソガシー。

「それこそ」《こそ》

35. それこそバケツをひっくりかえしたような大雨だ。　○イヤー　ナーンテ　ナーンテ　ソーレコソ　バーケツ　フックルカイシタホドノ　オーアメダッタ　ナイ。

「～ばかりか」《ばかり》

36. 父ばかりか母もスポーツ好きだ。　○オヤジバッカデ　ノテ　カカモ　スポーツ　スキラ。

K.今にも行われる《ばかり》

37. もう食べるばかりにしてある。　○モー　クーバッカニ　シトク。

動作の完了直後《ばかり》

38. 今、仕事から帰ったばかりだ。　○イマ　キタバッカランダッ　テヤ。

基準《まで》

39. 駅までもうちょっとだ。　○エキマデ　モー　チットバッカラ　レヤ。

L.等量の反復《ずつ》

40. 一人ずつ呼んで話をした。　①フートラズツ　ヨンデ　シャベッテ　ヤッタ　ガー。／②フートラジチ　ヨバッテ　シャベッテ　ヤッタ　ガー。

M.等量の配分《ずつ》

41. 一人に二個ずつみかんをやる。　○フトラネ　フタッツズツー　ミカンオ　クッラ。

＜一人に～くれた。＞

（3）限定・限界などをあらわすもの

N.限定《しか・だけ・ばかり・きり》

42. 酒はたまにしか飲まない。　①サケワ　タマーニシカ　ノマネ　レア。

43. 今朝は寝坊をしてパンだけ食べて来た。　○ケーサ　ネボ　コイテ　パンダケ　クッテ　キタ　ワー。

44. そんなに勉強ばかりしていると体に毒だよ。　○ソンゲ　ベンキョーバッカ　シテット　カラダニ　ドクラ　ロー。

45. うちの田が残っているきりで、よそは全部終わった。《田植えのこと》　○オラガンバッカ　ノコッテ　ヨソワ　ンーナ＜みんな＞　オワッタ。

O強調《しか・こそ》

46. もうこれだけしかないよ。　①ハー　コレシカ　ネーヤダ　レ。／②ハー　コッラケ

シカ　ネーヤダ　レ。／③ハー　コッレハエ　ネーヤンラ　ロー。

47. 今年こそいい年にしたい。　○コートシコソワ　エー　トシニ　シテー　デヤフー。

P.限界《だけ・まで》

48. これだけ言っても分からないのか！　○コローンド<これほど>　ユーテモ　ワカラネーヤンダ　カー。

49. 2千円くらいまでなら何とかなる。　○ニセンログライマデラバ　ナントカ　ナルコテヤ。<2千両くらいまでならば～。>

（4）陳述的なもの

Q.「～ば～だけ」《だけ》

50. 肥料をやればやるだけよく育つ。　○コヤシワ　ヤレバ　ヤルホド　ヨー　デキルコテヤ。

「仮定形・ば・こそ」《こそ》

51. 心配すればこそ言うんだ。　○ナーコト　シンパイシテルスケコソ　イーテ　ナルヤ。<お前のことを～>

「こそ・仮定形」《こそ》

52. 彼は文句こそ言え、人の言うことなど聞かない。　①アノ　ショワ　モンクバッカユーテ　シトノ　ユー　コトワ　キカネー　デヤフー。／②アノショワ　モンク　ユアンワ　イッチョマエラロモ　シトノ　ユー　コトワ　キカネー　デヤフー。

53.「～でこそあれ《コサレなども》」という言い方の存否。　○無し。

「未然形・ば・こそ」《こそ》

54. 押しても引いても動かばこそ。　○オシテモ　パッテモ　ズラネー　ヤ。

「～こそ。」《こそ》

55. 失礼なことを言わないでこそ。　○質問文の意味不明。

「～こそ～が」《こそ》

56. 今でこそ家から出ないが、昔はよく出歩いていた。　○イマコソワ　ドゴモ　デランネロモ　ムカシワ　ヨーッパラ　アエテタ。

「～ば～ほど」

57. 働けば働くほどもうかる。　○ウゴケバ　ウゴクホド　モーカル。

R.打ち消しとの呼応《まで》

58. 村長に聞くまでもないことだ。　○コンゲナガンダラ　ソンチョニマデ　キクマデモネ　コテヤ。

否定との呼応（それさえもない）《も》

59. 朝から忙しくて昼飯も食えない。　○アサッカラ　イソガシテ　オヒルモ　クワンネカッタ　レヤ。

否定的取り上げ《など》

60. こんなものなどいくらでもあるよ。　○コンゲアングライ　ドロンドモ　アル　コテヤー。

全面否定《だって》

61. 誰だってそんなこと言われたら怒るよ。　○ダルラッテ　ソンゲ　コト　イワレレバゴセヤク　コテ。

S.次の動作が不可能《きり》

62. 10年前に故郷を離れたきり、一度も帰っていない。　○ジューネンモ　イッタッキリウチ　カエッテ　ネ。

（5）モダリティー的なもの

T.不確かな気持ち《やら・か》

63. いつのまにやら眠ってしまった。　○イーツノ　マカ　ネテ　シモータ。

64. 何のことか分からない。　○ナンノ　コンダヤラ　サーッパリ　ワカラネ。

推定《か》

65. 後で遊びに行くかもしれない。　○アソビ　イグカモ　シラネ。

どちらかわからない《やら》

66. 来るのやら来ないのやらよく分からない。　○クールランダヤラ　コネヤンダヤラサーッパリ　ワケ　ワカラネ　レヤ。

はっきり言わない《やら》

67. どこやらへ引っ越したそうだ。　○ドゴラヤラ　ヒッコシタテ　ヤ。

U.非難《たら・てば》

68. お父さんたら今日も遅いのね。　○オトーサン　キョーモ　オセーヤンダ　ノー。

69. お父さんてば、子供のようなことを言って。　○オトーサン　コドモト　オンーナシラ　ネ。

Ⅲ. 総括（まとめ）

以上、当方言の副助詞は、質問文の共通語副助詞との対応関係が、次のように整理される。

1. 共通語と同形同義で対応

も、でも、かも、こそ、って、すら、さえ、くらい、ほど、「ば～ほど」、やなんか、まで、までも、きり、だけ、しか

2. 共通語と同語的ながら、語形がやや変じて対応

ばかり（に）ーバッカ（ニ）、だってーラッテ、くらいークレ、ずつージチ

3. ある共通語と別の共通語とで対応

なんてーナンカ、などーナンカ、などーダノ、などーグライ、
ほどーモ、だけーホド、「ば～だけ」ー「バ～ホド」、
やらーカ、かーヤラ、
すらーマデ、すらーモ

4．共通語と方言的な語で対応

さえーサカ、さえーラ、くらいーバカ、きりーバッカ、
しかーハエ、とてーダッテモ、
「こそ・仮定形」ーバッカ、
「こそ～が」ー「コソ～ロモ」、「仮定形・ば・こそ」ー「終止形・スケ・コソ」

5．共通語の対応語形がないものー全くないか別な言い回しになるかのもの

（1）全くないもの

なり、だけに、たら、てば、
「～こそ。」、「未然形・ば・こそ」「でこそあれ《コサレなども》」

（2）別な言い回しになるもの

「こそ・仮定形」ー「バッカ～テ」・「～ロモ」

以上によると、当方言における副助詞は、多くを1．2．3項のものによっていることがわかる。ということは、多くは、共通語的なものによっているということである。

そのうち、第3項のものが、注目される。共通語的なものを、多様に融通して使っているということである。そのような融通が利くのは、副助詞の表す意味領域の境界が、比較的緩いからでもあろう。しかし、それ以上に、方言副助詞生活には、むしろ在り合わせの共通語副助詞で間に合わせてしまおうという意志傾向のようなものがあるのかもしれない。方言副助詞の使用必要感が、その程度のものなのかもしれない。

第4項の中をよく見ると、「バ（ッ）カ」のように、同じ方言語詞がいくつもの共通語詞と対応したりしていて、内容的には、簡素である。方言の世界においては、方言副助詞は、あまり発達していないということが指摘されるのである。

そのこととも関係があろう。第5項のように、あまり複雑な（ないしは微妙な）副助詞的意味世界の部分については、ほとんど対応的方言副助詞がないか、あったとしても、副助詞とは異なった表現法による言いまわしになっているかである。しかも（2）項のような例は、1例とごく少ない。

このようにみてくると、方言世界における副助詞は、格別に繁茂しているなどとは認めがたい。共通語的なものに依拠しつつ、それをよく用いてまかなっているというように受け取れる。

おそらく、方言の世界にあっては、このような副助詞的な意味世界は、他の表現法、たとえば、副詞や形容詞、句的・文的表現法、比喩的表現法などによってこそ大いにまかな

われているのではないかと推察される。

（おおはし かつお　新潟大学教育人間科学部）